

Title	語文 第1輯 編輯後記/投稿規定/奥付
Author(s)	
Citation	語文. 1
Issue Date	1950-11-10
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/68367">https://hdl.handle.net/11094/68367</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 編輯後記

大阪から一つづらゐる國文学誌が出て、もよからうと話した末、とにかく最初は研究室の者で書かう、あとは大方の寄稿をまたうといふことになつて、第一輯の準備にたりかゝつた。

ちやうどその頃ジエーン台風にみまはれた築港辺の人の話では、天井まで浸水し、皆附近の石炭穀の丘へ避難した。嵐がやゝ静まつて二三時間、濁水満々たる中を早くも伝馬を操つた君子が御入來になつたさうだ。留守の家に横づけにして、文字どほり梁上を潤歩しながら獲物を船に積こむ。炭穀の上であれよあれよとぢだんだんふむ人々をしり目に悠々と漕ぎさつてゆくといふ。次のキジャの時には、警防団が早く避難しろとさけんで廻つてもその辺の人々はなかなか出ようとしない。曰く、水よりも泥棒がにくおます。

◆  
こんなあさましく下れる話を聞いたら西鶴を思ひ出した。西鶴のはげしさもたしか

に大阪の精神だ。この地の人々は自身の血肉で感得しないかぎり教義も概念も受付けようとしない。いつたん血肉で感得すると旧套を脱することも早い。長流、契沖、西鶴らの方法はこの地の風潮とたしかにつながらるものがある。あの頃の浪速はとにかく新文化の発生地であつた。

◆  
われわれは学風とか学派とかそんなことは問はない。いやしくも價值ありと認める論文はできる限り掲載する。また掲載論文等に対する批評質疑も採るべきものは公表したいと思ふ。御支援を仰ぐ次第である。

◆  
誌名「語文」は小島吉雄博士の命名にかかる。文字も同博士が嵯峨本徒然草より集字された。

◆  
仮名遣は各筆者の執る所に従ふ。漢字は印刷所のもの(当用漢字)により、やむを得ないものだけは特に作ることにする。

◆  
本誌の誕生には文進堂前田勘次氏、邦進社前田春雄氏の好意による所が大きい。感謝の意を表する。

(林記)

## 投稿規定

○直接購読者は投稿することができ。○原稿の内容は國語・國文学・國語教育に関するものであること。分量は四百字詰原稿用紙二十枚以内とする。

○原稿の送り先は「豊中市柴原、大阪大学文学部國文学研究室内、語文編輯委員」宛。

○原稿の採否は編輯委員に一任のこと。○採用しなかつた原稿は返送料が添附してあれば返送に応ずる。

○一括購読者が投稿する際には代表者から紹介せられたい。

### 編輯委員(五十音順)

犬養 孝 宇佐美喜三八  
小島 吉雄 田 中 裕  
林 和比古 八 木 毅

### 購読について

○購読希望者は発行所宛前金を添えて申込むこと。(送金は振替を利用されたい)

一 部 四十円 送料六円  
一年分(四回分)百六十円(送料共)  
○五冊以上一括購読の時は一割引の上送料は不要とする。

第二輯 一月下旬発行予定

語 文 第 一 号

定 價 四 十 四

送 料 六 円

昭和二十五年十一月五日印刷  
昭和二十五年十一月十日發行

豊中市 榮原

編輯者 大阪大学文学部國文学研究室

代表者 小 島 吉 雄

發行者 大阪市南区横堀七丁目一九

前 田 春 雄

印刷所 大阪市都島区野田町四三

天 業 社

大阪市南区横堀七丁目一九

發 行 所 邦 進 社

電話船場②一九九〇番  
振替大阪一二三二三五番